

スポーツとB型肝炎

ワクチン接種で感染予防を



執筆者

久住 英二

くすみ えいじ

立川パークスクリニック 院長

1999年新潟大学医学部卒業。虎の門病院で内科研修し、血液科医員として臍帯血移植に従事した。血液専門医であり感染症やワクチンに造詣が深く、新型コロナウイルス感染症流行に際して数多くのニュースや情報番組にて解説者を務めた。

私は血液内科医として、血液がん患者さんの根本的治療である骨髄や臍帯血の移植を手がけていました。しかし血液がんが治っても、感染症で苦しみ、亡くなる方が少なくありませんでした。その経路から、感染症について正しく知ってもらう活動や、ワクチンの普及に力を入れています。

B型肝炎ウイルスはスポーツでも感染します。ボクシングやレスリング、相撲、ラグビー、アメリカンフットボールなど出血を起こしやすいコンタクトスポーツでの感染が報告されています。アメリカでは1991年から全員がB

型肝炎ワクチンを接種しているため、だいたい30歳より若い人は感染しません。ところが日本では、このようなコンタクトスポーツをする人は予防されておらず、感染に対し全くの丸腰であり、対策すべきです。

B型肝炎ウイルス感染は、ウイルスを含む体液（唾液、血液、精液、膣分泌液など）を介して感染します。感染した年齢によって、無症状の慢性感染やキャリアになる場合と、一過性の急性感染で終わる場合に分かれます。

キャリア化は3歳未満の感染によって起き、ウイルス血症のある母体から生まれた時の母子感染が代表的です。妊婦のウイルス感染の有無は健診でチェックされ、母子感染リスクが高い場合は予防措置がとられるため、母子感染は減少しました。また、B型肝炎ワクチンは、2016年10月1日から定期接種として0歳児に行われるようになりました。これもキャリアの減少に役立つと考えられています。

一過性の急性感染は、成人では性交渉による感染が代表的です。感染した人の50〜70%は無症状で、一部の方が急性B型肝炎を発症します。

肝炎の症状は、皮膚が黄色くなる黄疸以外に特異的なものではなく、倦怠感や食欲低下、嘔気などです。何だか体調が優れなかったがそのうち自然によくなった、と肝炎に気づかず終わってしまうケースが多いようです。学校での健診や、会社での法定健診では、B型肝炎ウイルス

感染歴を調べる項目は含まれていないため、受診して医師が特に疑って検査した場合や、人間ドックで多岐に渡って血液検査を受けなければ気づかれません。

2016年以前に生まれた人は、医療従事者や海外の学校に通った経験のある人以外は、B型肝炎ワクチンを受けていません。乳児期にB型肝炎ワクチン接種を受けると、接種後20〜30年間はB型肝炎の発病が予防されることが知られています。HBs抗体価が検出限界以下になっても防御効果が続くため、医療従事者など感染リスクの高い人を除いては追加接種する必要はないと考えられています。

日本ではB型肝炎ワクチンは2種類販売されています。どちらのワクチンとも6カ月間に3回接種を受けます。予防効果には差はなく、HBs抗体の陽転率（免疫の得られる率）は1回目接種後で25%、2回目接種後で50%、3回目接種後で95%程度です。3回接種しても5%ほどの方は免疫が得られませんが、さらに3回を追加して接種すると抗体価が上昇する人が多いです。

B型肝炎ウイルスワクチンは、どの医療機関でも入手が可能で、特に定期接種を行っている小児科クリニックでは常在庫しています。小学校高学年や中学生など接種を受けていない年代（2016年以前生まれ）のお子さんは、小児科を受診したついでに接種について質問してみることをおすすめします。